

【書評・紹介】

池上二良ほか編『ウイльта語を話しましょう』

(ユジノサハリンスク, 2008年3月, 107頁)

笹倉 いる 美

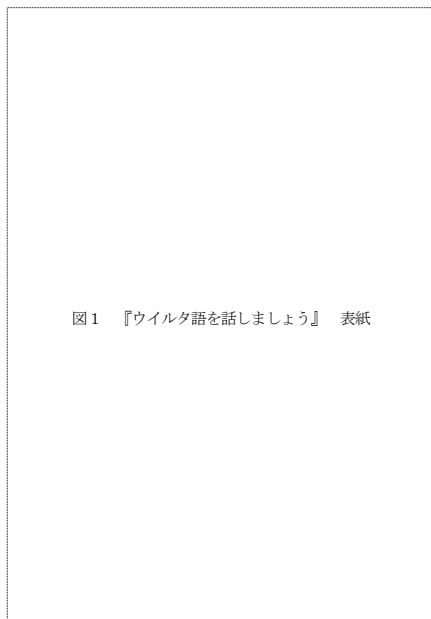


図1 『ウイльта語を話しましょう』 表紙

待望のウイльта語の教科書が2008年3月に発行された。タイトルは「ウイльта語を話しましょう」。北海道大学名誉教授でウイльта語研究の第一人者である池上二良先生と、サハリン在住の関係者の方々の労苦の結晶である。

池上先生からウイльта語の教科書づくりに携わっておられるということを知ったのは、少なくとも10年以上前のことになるように思う。先生が調査で、筆者のいる網走へいらっしゃる際などに、教科書のこと話が話題になり、また先生がこの件でサハリンへ行かれたり、逆にサハリンから研究者が来て池上先生のご自宅に滞在されたりということを知っていただいた。

池上先生がウイльта語教科書(以下、教科書とよぶ)のことでお話しになっていたことで、印象に残っているのは、「この教科書づくりはサハリンのウイльтаの人たちが中心になって行わなければならない」と

いうことであった。教科書を発行するには当然ながら経費がかかるため、サハリンよりは日本で印刷するほうが現実的だったかもしれないが、ウイльта自身の手で発行することに意味があるとお考えだったようだ。このことは、発行までに相当の時間を費やすことになった原因の一つかもしれない。教科書は、最近サハリンで発行されている他の多くの印刷物と同じように、サハリンの石油開発資本の資金援助を受けて発行された。

教科書の体裁は、A4判で、全107頁、フルカラー。一見すると絵本のようながっしりとした作りである。表紙(図1)はトナカイのいるツンドラを背景にして、民族衣装を着た女の子がウイльта語の教科書をひろげているというイラストが描かれており、この教科書が子ども向けを意識していることがわかる。山田祥子氏もウイльта語教科書の共同執筆者の一人であるE.A.ビビコワ氏からの情報として、「現地の小学校初等教育で用いられるべく構成されている」(山田2008:446)と紹介している。

文字で表記する習慣のなかったウイльта語の教科書を作るということは、ウイльта語を紙のうえにどうやって書き表わすかという正書法を考えることでもあった。池上先生はラテン文字系とキリル文字系の二つの案を作成、検討されていたが、教科書には結局キリル文字が採用されている。先生からは、言語学的にはラテン文字がよいが、学習者はロシア語になじみがあることからキリル文字のほうが習得しやすいとの考えを知ったこともある。なお、教科書の文字表記については、前述の山田氏が詳述されているので参考にされたい(山田2008)。

教科書の表紙の見返しには、ウイльта字一覧がイラスト付きでかかれている。これを見るとウイльта字は25字(長音を別に数えると32字)でそれぞれに大文字・小文字がある。そのうち母音7字、子音18字であり、ロシア語を表記するキリル文字と形が異なるのは4字であ

る。長母音は文字の上に横棒をつけて表わす。文字の傍らには、その文字から始まる単語のイラストが添えられている。このイラストは、例えば油を保存するアザラシの胃袋、白樺樹皮製容器、シャマンの太鼓などのウイльтаの民族文化に特徴的なものが積極的に採用されたようだ。なお、池上先生の『ウイльта語辞典』（池上 1997）はラテン文字系が使われており、教科書の文字とは次のような対応になっている。（小文字で示す。上段が教科書、下段がウイльта語辞典）

## 【母音】

а е и о ө у э

а е і о ө и э

## 【子音】

б в г д з ј к л м н њ њ п р с т х ч

b w g d j j k l m n p r s t x č

次に山田氏が E.A.ビビコワ氏の情報に基づき整理したものにそって教科書の内容を紹介する。表中の文字教本とはこの教科書のことである。

文字教本の構成			期待される授業内容	
	ページ	内容	対象学年	内容
*	見返し、pp.1-2	文字一覧、奥付		
I	pp.3-24	絵	1 学年	導入（オリエンテーション）
II	pp.25-66	文字と単語	2 学年	書き方
III	pp.67-88	短い例文とテキスト	3 学年	初級文法
	pp.89-107	単語索引		

表 1（山田 2008:446）より

### I pp.3-24 絵／1 学年、導入（オリエンテーション）

イラストと符号で構成されている。符号は例えばイラストの下の一本線\_\_\_\_\_は単語を、一本線の先に鉤がついている場合は文を示すという凡例があるのだが、凡例にない、一本線に縦棒がはいるというものが登場したりする。音節の区切りを示しているのかと思う。ただし□のなかに、●（色は赤、青、緑）の三種をいれて、あるいは□を斜めにしきって音節を示すという凡例もあり、徐々にウイльта語の音のしくみに慣れるということを目的としたページではあると思うが、イラストと符号のみなので、独習するにはかなり勘を働かせる必要がある（図 2 参照）。

学習のはじまりの時点でさえ、母音を赤、子音を、青丸（硬子音）と緑丸（軟子音）を用いて二通りにわかるなど、母音と子音の違い、子音の性質にはかなりこだわっているようである。

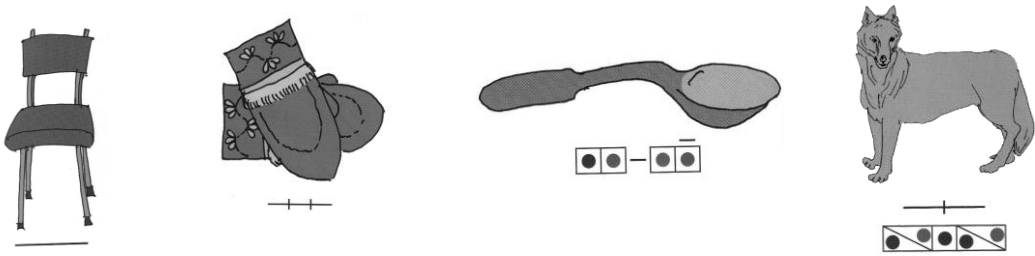


図2 異なる頁からのイラスト。椅子 (тэкку, 3 頁)。二股手袋 (мамбакка, 6 頁)。さじ (хундэ, 10 頁; 下の●は左から順に青・赤・緑・赤)。犬 (унда, 16 頁; 下の●は左から順に青・赤・青・青・赤、ただしこの頁では絵と音節図はあえて離してある)。

## Уилта азбукани

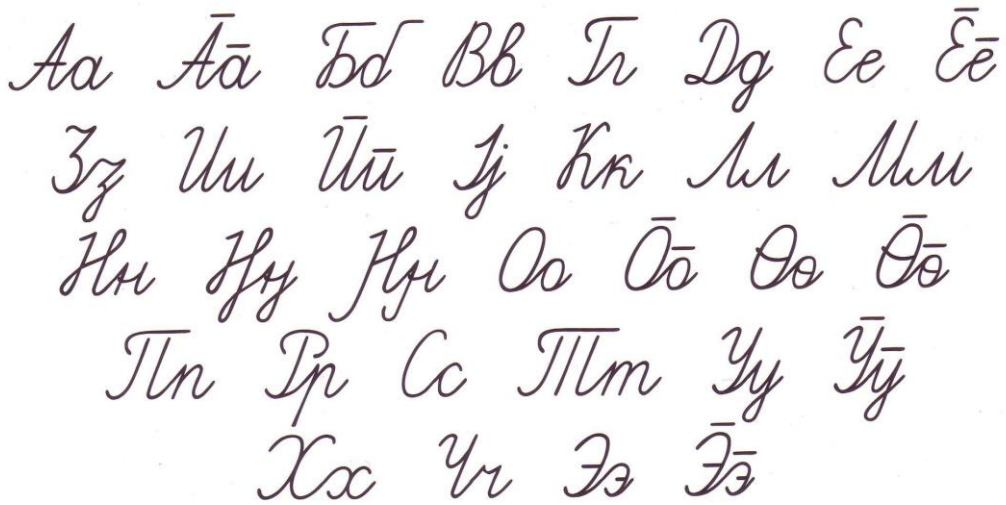


図3 ウイルタ字の筆記体

### II pp.25-66 文字と単語/2 学年 書き方

ようやく文字があらわれる。各文字を1 頁ないしは2 頁を使って学習するようになっていて、同時に単語や文章も学んでゆく。筆記体も基本的にはキリル文字に準じている。

最初にでてくるのは **A** である。ところが次にでてくるのは **M**、その次にでてくるのは **Y** である。これは一体どういう順番かという、出てきた文字を順に組み合わせて単語にしてゆくのである。A の次は mā 「さあ、ほら」でその次は m̄y 「水」という具合である。

ところでウイルタ語には北方言と南方言がある。例えば文字 **Y** のページで、でてくるのが m̄y という単語である。これは北方言で「水」という意味であり、南では mō と表記する。北方言と南方言を区別する場合は、北方言 (c)、南方言 (ю) が必要に応じて付されている。

### III pp.67-88 短い例文とテキスト/初級文法

数詞にふれたのち、いよいよ文法にはいる。まず所有を学び、形容詞を学び、疑問、時制を学んでゆく。そして短いテキストを読むようになっていく。

ちなみに網走市には北方少数民族資料館ジャッカ・ドフニという資料館があるが、ジャッカ・ドフニとはウイльта語で「宝物の家」という意味である。ジャッカが宝物で、ドフが家である。ではニはなにかということも、所有の部分で学ぶことになる。

最後にウイльта語＝ロシア語の単語索引がついている。教科書で使われている形そのままで引けるようになっている簡便版であることは、慣れないウイльта語を学習するにはかえって使いやすい。

残念ながら池上先生の出席はかなわなかったが、北海道新聞のサイトで教科書出版記念式典の様子を見ることができる。(http://www.hokkaido-np.co.jp/cont/video-archive/?k=2008042104.html 2009年2月28日確認)。教科書の出版を祝って、ウイльтаの人たちが歌や踊りを披露する、まさにお祝いの雰囲気である。

教科書の大きな目的であろう、ウイльта語にまずは親しむという点では、豊富なイラストが助けとなるし、初のウイльта語教科書であるというだけでも、学習意欲が増してくるのではないだろうか。独習者にそれほど親切な教科書というわけではなく、指導者がいることが前提の教科書である。そのため指導者の養成が今後の大きな課題となってくるだろう。また続編の発行も当然期待される。もちろんこの教科書の発行ひとつで、ウイльта語をとりまく様々な問題が解決するものではないが、教科書の発行にこぎつけたことは、今後の活動の拠り所となることと思う。

教科書には6名の執筆者名が書かれているが、池上先生のお名前は、学術的指導者として別途明記されている。これはサハリンの方たちからの池上先生に対する感謝と敬意の現れではないかと思う。

### 書誌情報

ISBN 978-5-88453-211-3

*Уилтадаирису: Говорим по-уильтински.*

Дз. Икэгами, Е. А. Бибикова, Л. Р. Китазима, С. Минаго, Т. П. Роон, И. Я. Федяева

Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство

2008

本稿執筆にあたり、北海道大学大学院教授津曲敏郎氏、北海道大学大学院生山田祥子氏から資料の紹介、学術上の助言をいただいた。

### 参考文献

池上二良

1997『ウイльта語辞典』北海道大学図書刊行会

山田祥子

2008「方言差をどう「書く」か：ウイльта語文字教本の表記と今後の記述研究」『日本言語学会第137回大会予稿集』日本言語学会 pp.444-449

(ささくら・いるみ／北海道立北方民族博物館)